

猿新聞

獣害は

縄文時代から

日本は南北約2000kmに長く伸びた列島の亜熱帯に至る多様な気候帯をもち、多様性に富み、先進国の中では唯一、大型の野生動物が人のそばで暮らすのどかな国です。

その日本列島に人が住み始めたのは、数万年前の地球最終氷期と言われています。

その後、気候は温暖化に向かい、縄文晩期に水田稲作が朝鮮半島から北九州付近に、弥生時代には、本州や四国に広まっていきまし

た。これが農耕の始まりで、獣害問題の始まりでもあります。

縄文時代には、田畑に小屋を建てて不寝番をするなど、野生動物との対立関係が続いています。

狩猟や木の実などの採集を基盤とする生活が、農耕が始まることにより集落が形成され、現代の私たちの生活につながる基盤が出来上がっていききました。この時代も野生動物は食料であったが、家畜の導入

に伴い、依存比率は次第に下がり、狩猟は作物を野生動物から田畑を守る、現代の有害駆除の色合いが強くなっていきます。

江戸時代では武士より農民の方が害獣駆除用として、多くの鉄砲を持っていました。

江戸時代中期の八戸藩では凶作に加え、イノシシとシカの被害によつて飢饉さえ起きています。農耕の開始以降、人は作物を守るために垣を築いたり、収穫期には田畑に小屋を建てて不寝番をするなど、野生動物との対立関係が続いています。

自然破壊

日本の自然は、人間の活動に伴い、人間の都合の良いように改変され続けて来ましたが、いわば農業も、人間に都合のいい植物や動物を増やすために、自然を大きく改変した人類最初の、自然破壊と言つて良いでしょう。

野生動物の生息環境も、常にその影響下に置かれ、激しい森林破壊は動物たちを奥山へと追い立てました。

陸地に棲む種の3分の2以上が森林に生息しており、生物多様性を保全する上で重要な

役割を担っています。

江戸時代には、人口の集中した江戸や大坂の大都市では大火が頻発するようになり、その復旧資材に充てるため、良質の木材資源に恵まれていた地域の中には、全山が伐採された森林が多くありました。しかし、江戸時代以降、幕府や藩によるきびしい森林保護制度が定められ1666年に幕府が発した「諸国山川掟」では、森林開発を抑制し造林を奨励しています。更に遡つても禁伐令がたびたび出されていたことから、江戸時代においても過剰な森林資源利用が社会問題になっていたと考えられています。また、文献によると江戸時代以前、人間活動に由来すると考えられる野火が多発していたことが知られています。

名張地方でも10世紀頃、東大寺による大乱伐が行われ、現在の茶臼山が禿げ山になったことがあります。

平安時代名張市西部は東大寺領極楽畑があったところで、黒田の悪党で有名な土地柄です。



編集責任者 山村 準
tel:0595-63-1725
Email jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会

発行部数

【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区：205部
つつじが丘：430部

【全戸配布】
国津地区：380部
滝之原地区：125部
市民センター：90部
(9地区)
名張市議会：20部
名張市役所：30部

明治の乱獲

江戸時代、我が国では仏教思想や厳しい銃規制・狩猟規制により極めて豊富な野生動物が人間の近くで生息していました。しかし、明治に入り猟銃の解禁や、村田銃の開発により銃の性能が飛躍的に向上したことや、北部戦線へ送る毛皮の需要の増加なども重なり、野生動物に対する狩猟圧はかつてなく高まり、庄はかつてなく高まり、明治年間を通じて野生鳥獣は激減し、多くの種は地域的絶滅の危機に瀕し、いくつかは絶滅した種もありました。

維新のドサクサに紛れ幕藩時代の「お留め山」の野生動物が乱獲にさらされました。その象徴がニホンオオカミの絶滅で1905年（明治38年）1月23日（奈良県吉野郡東吉野村鷲家口で、地元

の猟師によって捕獲されたのを最後に、絶滅したと言われています。

また、朱鷺も、1981年（昭和56年）1月11日から1月23日にかけて、佐渡島に残された最後の野生のトキ5羽全てが捕獲され、佐渡トキ保護センターにおいて人工飼育下に

これにより、日本の野生のトキは絶滅したとされています。捕食者オオカミの絶滅で生態系の最も重要な機能が崩れ、100年後の今、その影響が顕著に顕れイノシシやシカの個体数が激増しています。

大正、昭和に入つて、欧米流のレジャーハンティングが大衆化し、野生鳥獣はさらに減少を続け、資源管理の視点から減少する一方の野生動物は「守るべき存在」と位置付けられ、動物愛護の観点からも保護の必要性が認められた山。

れ、狩猟規制などが強化されたことによつて、野生動物の個体数は明治初期から比べると大幅に回復し、シカ、イノシシ、サルなどは増え過ぎ状態。

日本における野生鳥獣を保護する法律として、長年にわたり運用されてきた「狩猟の適正化に関する法律」があります。その歴史は1896年（明治28年）に成立した「狩猟の管理規則」を定めた法律に始まります。

動物の殺傷を禁じる触れは記紀の時代から何度も出されていますが、これらは神道における穢れ（けがれ）の概念や仏教の殺生戒を前提としたもので、動物の管理を目的としたものではなかったが、保護には繋がっていました。

第二次世界大戦中は、用材調達のため森林の伐採が激化。また、戦後示された拡大造林事業は、混交林の多くをスギ、ヒノキの単相林に変える森林の植生を根本から変える政策転換で、山に餌がなくなるなど多くの野生鳥獣の生息にマイナスに働き現代の獣害問題に繋がっています。

しかし反面、シカにとつては願ってもないボーナスとなったのです。新たな植林地には食べやすい苗や若木が多くあり、しかも伐採後、林内の日照が増えて下草が茂り、まさにシカ牧場状態。もともと開けた森林や林縁を好むシカに、絶好な生息環境と餌を同時に与えたようなものとなったのです。



絶滅したニホンオオカミ

他の地域のオオカミよりも小さく中型日本犬ほどですが、中型日本犬より脚が長く、脚力も強かったとされています。耳が短いのも特徴の一つで、周囲の環境に溶け込みやすいように夏と冬では毛色も変化していたと言われています。

獣害再浮上

明治以降、鳴りを潜めていた獣害が、平成に入るところから急激に再浮上してきました。

明治中期以降、平成前期に至るまでシカなど野生動物は数を減らし、山間地域の住民は獣害の無い100年と言いい、獣害対策の技術もその必要性も忘れていました。

獣害対策は、昔から現代まで基本的には変化なく受け継がれ、今に至っています。その間に起こっている農業政策の転換など、これに伴うミスマッチはなかったのか？

その最たるものに減反政策があり、耕作放棄地の拡大など現在の獣害問題に大きな影響を及ぼしています。

里山荒廃

1950年頃からはじまる日本の農村の近代化で、エネルギー消費構造が大きく変化し農村の暮らしと環境が大きく変貌しました。化石燃料の普及による薪炭の需要減少や、化学肥料の普及による森林由来の堆肥需要の減少に伴い里山は荒廃。里山の荒廃の影響は直ちに国民生活に直接脅威をもたらすことが少なかったため、これまで重視されてこなかった里山を取り巻く状況は大きく変化し、個体数を減らした野生鳥獣もいますが、個体数を増やした種もみられ、結果として農林業被害の増加など様々な課題が生じています。

数百年以上人手が加わり続けた里山を維持するには、人間の手で常に微妙に調整する作業が必要です。

定期的な伐採や落葉かきなどの人手が加えられることによつて野生動物の発芽・生育が維持され、特に多様な生態系を構成する場としての機能を十分発揮することができま

す。

世界的な森林資源の枯渇に加えて、地球温暖化対策の観点からも、里山の森林は、持続的な利用が可能な潜在資源として、あらためてその役割が見直されつつあります。



名張市

獣害対策について

現在、名張市では、有害鳥獣捕獲が実施されています。期間は4月18日から10月17日までで、市内全域を対象に、シカ400頭、イノシシ150頭の捕獲を目標としています。

有害鳥獣捕獲は誰でも捕獲ができるわけではなく、狩猟免許を所持している、なおかつ有害鳥獣捕獲許可を市から受けた方のみです。捕獲方法は2種類で、銃器による捕獲(週一回合同で実施)と、わなによる捕獲(個人が箱わな・くくりわなで実施)があります。

わなで捕獲を行う場合、捕獲者は氏名、住所、電話

番号、許可証番号等を記載した標識を捕獲場所に明示する必要があります。

4～6月はカワウ、アオサギによる水産漁業被害防止として、名張市内の三河川(名張川・青蓮寺川・長瀬太郎生川)においても、銃器による捕獲が実施されています。

アライグマやヌートリア等の外来生物(ハクビシンやタヌキは対象外)については、市に申請することにより、狩猟免許を持たない方でも捕獲を実施することが可能です。また、1世帯につき1台であれば、捕獲檻の貸し出しを行っています。(農業被害は農林資源室、生活環境被害は環境対策室に相談して下さい)

文：古川 高志さん

対策の決め手は 加害獣の特定

野生鳥獣による農作物被害は平成28年度が172億円と4年連続で減少傾向にあります。反面、アナグマ、アライグマ、タヌキ、ハクビシンなど中型獣による被害が全国的に増加傾向にあります。

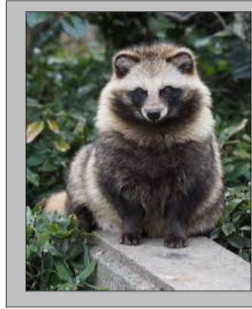
その背景には、耕作放棄地など生息に好適な環境が多くなり個体数が増加したことが大きな要因と考えられています。対策に携わる関係者の中型獣類に対する知識が高まり、加害獣の判別が正確に出来るようになったことも事実です。

被害の多くは、早朝、深夜といった人気のない時間帯に頻発しており、被害に気がついたときにはすでに手遅れ、

被害を起している獣名さえ不明のまま菜園が全滅という悲惨な事態も起こっています。今、各集落では、グループ柵や集落柵が設置されていますが、イノシシやシカなど大型獣類の侵入を防止する目的で設置されている網目が大きく、アナグマ、アライグマ、タヌキ、ハクビシンなど、中型獣に対応した柵ではありません。

中型獣類による農作物被害対策は田畑を個別に獣種に対応した正しい侵入防止柵で囲うことが最善です。中型獣類に対して効果的な対策を講じるためには、加害個体を正確に特定する必要があります。それには、被

害現場やその周辺に残された痕跡を正確に見分ける必要があります。加害獣の特定には足跡や糞を利用する方法などがありますが、初心者には難しいです。そこで、今、流行のセンサーカメラを利用して、その映像によって対象鳥獣を確認する方法が最も確実で、対象個体の活動時間や行動までもが把握できます。特に混同されやすい中型動物は、アナグマ、アライグマ、タヌキ、ハクビシンの4種です。



タヌキ(在来種)

・前足から肩にかけて横に黒い帯がある。

害現場やその周辺に残された痕跡を正確に見分ける必要があります。加害獣の特定には足跡や糞を利用する方法などがありますが、初心者には難しいです。そこで、今、流行のセンサーカメラを利用して、その映像によって対象鳥獣を確認する方法が最も確実で、対象個体の活動時間や行動までもが把握できます。特に混同されやすい中型動物は、アナグマ、アライグマ、タヌキ、ハクビシンの4種です。

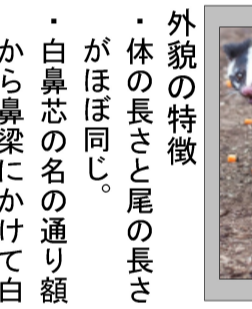
・四肢は黒色。
・尾が短い。
・体重は3～5kg
足跡
・指は4本、形は犬に似ている。
・足跡が梅花型なのが特徴。
・サイズは3～5cmくらい。



アナグマ(在来種)

・四肢は黒か褐色で短い。
・耳が小さく先端が丸みを帯びている。
・鼻が大きい。
・尾が短い。
・体重は10～12kg
足跡
・指は5本、長く湾曲した長い爪があり、これで土を掘る。
・サイズは横幅が4～5cmくらい。
・肉球は5つで他の動物より横幅が広く、爪が長いので爪跡がはっきりと残る。

・四肢は黒色。
・尾が短い。
・体重は3～5kg
足跡
・指は4本、形は犬に似ている。
・足跡が梅花型なのが特徴。
・サイズは3～5cmくらい。

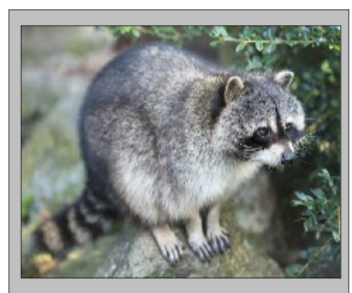


ハクビシン(在来種)

・外見の特徴
・体の長さ(尾の長さ)がほぼ同じ。
・白鼻芯の名の通り額から鼻梁にかけて白い帯がある。
・指は5本。
・尾は長い
・体重は3～6kg
足跡
・指5本で、爪有り。
・サイズは縦幅が4～5cmくらい。
・木に登ることが多いので木に爪跡を残すことが多い。

・外見の特徴
・尾に黒い6～7段の縞模様がある。
・尾が比較的短い
・体重は4～10kg
足跡
・指は5本で細長く爪がある。
・サイズは6cmくらい。
・指の形の跡が人間の手のひらのように綺麗につく。
・後ろ足の足跡は縦長。

・外見の特徴
・尾に黒い6～7段の縞模様がある。
・尾が比較的短い
・体重は4～10kg
足跡
・指は5本で細長く爪がある。
・サイズは6cmくらい。
・指の形の跡が人間の手のひらのように綺麗につく。
・後ろ足の足跡は縦長。



アライグマ(外来種)

・外見の特徴
・耳が小さく先端が丸みを帯びている。
・鼻が大きい。
・尾が短い。
・体重は10～12kg
足跡
・指は5本、長く湾曲した長い爪があり、これで土を掘る。
・サイズは横幅が4～5cmくらい。
・肉球は5つで他の動物より横幅が広く、爪が長いので爪跡がはっきりと残る。



スイカ被害色々

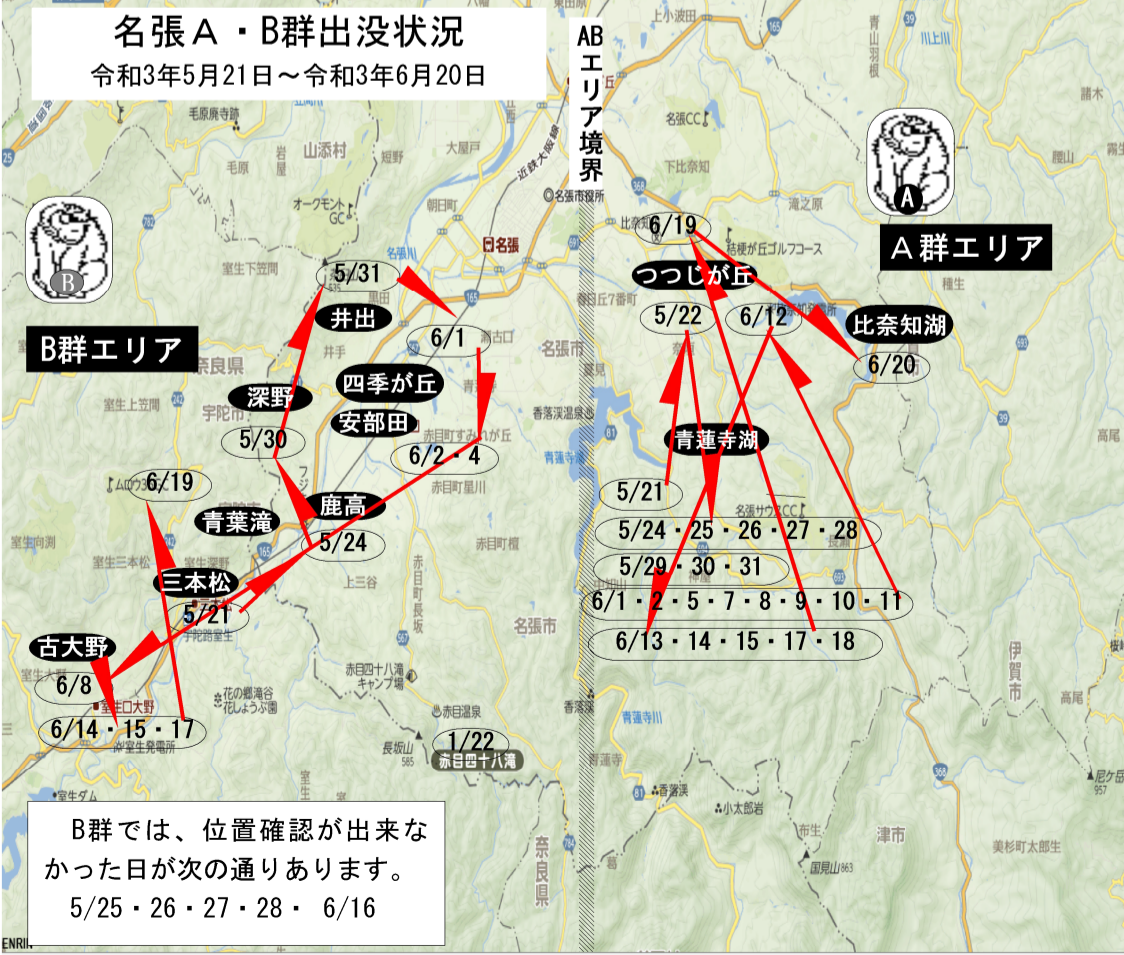
写真、中央の比較的小さい食痕はアライグマらしい。他の穴の大きいのはタヌキやハクビシンと考えられます。他にもカラスなど鳥類の食

・外見の特徴
・体の長さ(尾の長さ)がほぼ同じ。
・白鼻芯の名の通り額から鼻梁にかけて白い帯がある。
・指は5本。
・尾は長い
・体重は3～6kg
足跡
・指5本で、爪有り。
・サイズは縦幅が4～5cmくらい。
・木に登ることが多いので木に爪跡を残すことが多い。

・外見の特徴
・体の長さ(尾の長さ)がほぼ同じ。
・白鼻芯の名の通り額から鼻梁にかけて白い帯がある。
・指は5本。
・尾は長い
・体重は3～6kg
足跡
・指5本で、爪有り。
・サイズは縦幅が4～5cmくらい。
・木に登ることが多いので木に爪跡を残すことが多い。

・外見の特徴
・体の長さ(尾の長さ)がほぼ同じ。
・白鼻芯の名の通り額から鼻梁にかけて白い帯がある。
・指は5本。
・尾は長い
・体重は3～6kg
足跡
・指5本で、爪有り。
・サイズは縦幅が4～5cmくらい。
・木に登ることが多いので木に爪跡を残すことが多い。

とも多い。
ハクビシンやアライグマによる被害は、農村部はもとより市街地や都市部に生息域を広げています。
最近、市街地では家庭菜園を趣味とする人が多くなりました。そこで問題なのは、街の人が楽しむ程度の畑では、しっかりとした鳥獣害の防除対策が取られていない場合が多い点です。
今後は、具体的な対策を農家が個人で行うだけでなく、地域全体で進めるためには、街の人たちにも、野生獣に対する正しい知識や対策の必要性について理解を深めることが重要で対策のひとつの鍵になります。



痕も見受けられます。皆さん、この証拠写真で正確な加害鳥獣が特定できますか？
写真：アスレチック農園HPより

世界で最も北に生息するサルは、青森県下北半島に暮らしているニホンザルで「北限の猿」と呼んでいます。また、世界で最も南に暮らすサルは、アフリカの南端に暮らすチャクマヒヒで「南限の猿」と呼んでいます。温暖化が進展すると「北限の猿」は兎も角「南限の猿」の退避地

はどこになるのだろうか？
ニホンザルは北限の猿と呼ばれ青森県の下北半島に暮らしているのが北限で、本州以南、九州の屋久島に至るまで幅広く生息しています。ニホンザル寒冷地適応能力や生態的機構については従来から注目されてきました。温暖化が進むにつれ、深い積雪地帯に生息するサルたちにとっての越冬条件は、格段に良くなり、生存率は高まり個体数の増加が予想されます。

名張A群は、青蓮寺湖の桑の実に集中して、青蓮寺湖湖畔か

越冬条件は、格段に良くなり、生存率は高まり個体数の増加が予想されます。今後は、あまり手荒なことをせず、生息地の保全や個体数の管理などを注意深く行う必要があると考えます。

桑の実が食べ尽くされるとき、夏野菜に「リバウンド」するかもしれません。くれぐれも注意が必要です。

名張B群は、井出、坂の下、四季が丘、鹿高、深野、古大野など広域に出没し被害が出ています。平成27年度に頭数を8割減少させたという大規模な個体調整を実施しましたが、遊動域や個体数は当時に戻りつつあります。今後は、あまり手荒なことをせず、生息地の保全や個体数の管理などを注意深く行う必要があると考えます。

名張B群は、井出、坂の下、四季が丘、鹿高、深野、古大野など広域に出没し被害が出ています。平成27年度に頭数を8割減少させたという大規模な個体調整を実施しましたが、遊動域や個体数は当時に戻りつつあります。今後は、あまり手荒なことをせず、生息地の保全や個体数の管理などを注意深く行う必要があると考えます。

名張B群は、井出、坂の下、四季が丘、鹿高、深野、古大野など広域に出没し被害が出ています。平成27年度に頭数を8割減少させたという大規模な個体調整を実施しましたが、遊動域や個体数は当時に戻りつつあります。今後は、あまり手荒なことをせず、生息地の保全や個体数の管理などを注意深く行う必要があると考えます。